

# かいてんもくば 回転木馬での やさしさ

ヒラリー・ワトキンス・レモン  
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)



ダミアンが遊園地に入ると、陽気な音楽が聞こえてきました。おばあちゃんは、ダミアンと妹のアデルを、大好きな回転木馬に連れて行ってくれました。回転木馬では、輪っかを使った楽しいゲームができます。ダミアンはアデルに遊び方を教えてあげるのが待ち切れません。ダミアンたちは列にならびました。回転木馬は大きくてカラフルで、ポニーの乗り物がたくさんあります。子供たちはニコニコ顔でポニーに乗って、くるくる回りながら手をふっていました。

「はじこのポニーに乗ると、輪っかのゲームができるんだよ！」ダミアンはアデルに言いました。「あの子たちが持っているぼうが見える？ それと、輪っかを持っている人がいるでしょう？」

ダミアンは係員を指さしました。係員は輪っかを差し出して、回転木馬の近くに立っていました。回転木馬に乗った子供たちは、輪っかにぼうを通して輪っかを取ろうとしました。輪っかが取られる度に、係員は新しいものを差し出しました。

アデルは手をパチパチたたきました。「わたし、あの輪っかを全部取りたい！」

ダミアンたちはやっと列の先頭にたどり着きました。ところが、回転木馬にはあと1頭しかポニーが残っていませんでした。

おばあちゃんが言いました。「ダミアン、アデルはまだ一度も乗ったことがないから、最後の一つをゆずってあげたらどう？ あなたは次の回で乗ったらいいんじゃないかしら。」

「分かったよ」とダミアンは不満そうに言いました。ダミアンは係員がアデルをピカピカの茶色のポニーに乗せるのを見ていました。そして係員はアデルに輪っかを取るためのぼうを手渡しました。

音楽が流れ、回転木馬が回り始めました。ダミアンは、おばあちゃんと一緒に横からアデルを見ていました。ところが、アデルはぼうを反対向きに持っているではありませんか！ 大きな取っ手の部分ではなく、細くて長い、輪っかを通す方をにぎっていたのです。

「アデル、ぼうをさかさに持つんだ！」とダミアンはさげました。でも周りの音にかき消されて、アデルにはダミアンの声が聞こえていないようです。輪っかを通りすぎるとき、アデルのぼうが輪っかにふれました。でも大きな取っ手がじゃまをして、輪っかを通すことができませんでした。

「アデル、ぼうを見て！」ダミアンはまたさげました。「そんなふうには持っていたら、輪っかを取れないよ！」

でもアデルには聞こえません。くるくる回る回転木馬で、ニコニコしてキャッキヤと笑っています。アデルのぼうは、何度も何度も輪っかにふれました。でも一つも取れませんでした。

ダミアンはぶつぶつ言いました。アデルは自分の番を無駄にしているのです！ もしダミアンが回転木馬に乗っていたら、輪っかを全部取っていたことでしょう。

回転木馬が止まると、ダミアンはアデルにかけよりました。

「ぼうの持ち方を教えたでしょ！」とダミアンは怒鳴りました。「なんで聞いてくれなかったの？ 全然ちがったじゃないか！」

アデルはダミアンに言い返しませんでした。泣きもしませんでした。ただそこに立って、小さく小さくなっていきました。

ダミアンはむねがドキドキして、顔が熱くなっていきました。アデルが輪っかを一つも取れなかったのを見て、ダミアンははらが立ちました。でも、アデルにとってはこれが初めてだったのです。それに、アデルは楽しんでいました。この瞬間までは。

ダミアンは最悪な気分になりました。アデルに怒鳴らなければよかったと思いました。

「ごめんね」と静かに言いました。「今のはやさしくなかった

ね。」

アデルが顔を上げました。

「どうやったら輪っかが取れるか、コツを教えてあげようか？」とダミアンは言いました。「次はぼくがとなりにすわって、助けてあげるよ。」

アデルはうなずきました。

それからダミアンはおばあちゃんの方を向いて言いました。「アデルがもう一度乗れるように、チケットを2まいお願いしてもいい？」

おばあちゃんはにっこりしました。「もちろんよ。」●

このお話は、フランスでの出来事です。

